

イングランド英語の発音の最近の傾向と標準語の概念について

～単語リストの録音資料を用いて～

牧野武彦(中央大学)

mackinaw@tamacc.chuo-u.ac.jp

1 はじめに

1.1

外国語の音声の研究には、常にデータ資料入手という壁がつきまとい、どうしても現地の研究者による研究の輸入になりがちである。しかし私は、(株)デンソーからの依頼に応じてイギリスとアイルランドの方言音声収集用単語リストを作成し、それに基づいて収集された音声データの提供を受けた。昨年はその一部を予備調査して結果を提示した(牧野 2002)。

本発表はそれを受けて、対象をイングランドに絞り、最近のイギリス本国での記述的研究・発音辞典に見られる記述と、上記のデータとの間に相違点があるかどうかを精査する。

特に注目するのは、発音表記体系において、発音辞書・音声学書間で用いる記号に食い違いが見られる部分である。可能であれば、どの表記が妥当であるか、データを元に判断を示す。

1.2 データについて

- Wells (1982) の *standard lexical sets* を元にして牧野が作成した 118 語のリストをスタジオでPCM録音したもの。量子化ビット数は 16 ビット、サンプリング周波数は 16kHz。
- 収録地の5都市は、ロンドン、バーミンガム、カーディフ、エディンバラ、ダブリンである。本発表で用いるのは、イングランド南東部の方言域に属するロンドンと、イングランド西中部の方言域に属するバーミンガムのみ。
- 1都市につき、1つの単語は男性 12 回＋女性 12 回＝24 回録音され、5都市の総発話数は 14160 個である。但し、発話者は 1 都市につき男性 40 名＋女性 40 名＝80 名いるため、1人の発話者が 118 語すべてを発音しているわけではない。
- 発話者の年代は、20 代、30 代、40 代、50 代、60 代である。1 都市につき男女それぞれ各年代が 2～3 名ずつ配分されている。
- 発話者の学歴は高校卒業以上である。

2 検討箇所とその問題点

2.1 STRUT の母音 /ʌ/

[ʌ] の記号そのものは、半開・後舌・非円唇母音を表すものであるというのがIPAの規定であるが、イギリス英語においては、**strut** の母音がこの母音で表すには適切なものではなくて久しく、現在は半開・中舌・非円唇母音の [ɐ] であるとされる。

本発表においては、手持ちのデータが実際にそのような傾向を持っていることを確認する。

2.2 TRAP の母音 /æ~a/

この母音は伝統的に /æ/ と表記されてきており、IPA で CV3 [ɛ] と CV4 [a] の中間に敢えて [æ] が設けられているのは、あたかも英語のこの母音のためであるかのように見える。イギリスの標準的発音でこの母音が低めになる傾向があることは指摘されていることであり、それを反映して /a/ と表記する文献も現れてきているのであるが、ここでは、この母音の変化が /æ/ を捨て去るのに足るものなのかどうか問題となる。

2.3 BATH の母音 /ɑ:~æ/

いわゆる **ask-words** として、イギリスでは /ɑ:/ で表記されてきているものである。しかし、ODPでは、これらの語に対して一律に /ɑ:, a (=æ)/ の表記を与え、いわゆる **short a** を一律に /æ/ とする発音も標準的発音の範囲に入るとの主張を展開している。本発表では、その主張がどの程度データに表れているのかを観察することになる。

2.4 SQUARE の母音 /eə~ɛ:/

この母音は伝統的には二重母音とされているが、最近、単母音化の傾向が頓に強まっている。そのことから、伝統的な /eə/ に対して /ɛ:/ の表記が現れてきているのであるが、本発表で用いるデータはどのような傾向を示すであろうか？

2.5 NURSE の母音 /ɜ:~ɚ:/

日本などでは弱母音の /ə/ と同じ記号を用いて /ɚ:/ と表記されているこの母音は、イギリスでは /ɜ:/ と表記されるのが普通であった。しかしこれも、/ɚ:/ という表記が現れてきている。IPA の /ə, ɜ/ の違いの規定、および弱母音の /ə/ との関係という観点から観察したい。

2.6 PRICE の母音 /aɪ~ʌɪ/

この母音は /aɪ/ という表記が定着しているのであるが、ODP は /ʌɪ/ という表記を導入してきた。この辞書の /ʌ/ の用法から考えて、出だしが ([a] の表す開・前舌・非

円唇ではなく)半開・中舌・非円唇であるということを表そうとしたものと考えられる。そのあたりがデータで裏付けられるかどうかを観察する。

2.7 DRESS の母音 /e~ε/

イギリスの標準的発音では、この母音は CV2 [e] と CV3 [ε] の中間に位置し、「特に区別の必要がない限りは普通のローマ字を用いる」という音素表記の記号選択の原則に基づいて /e/ が採用されていると考えられる。しかし、この母音は TRAP の母音とともに、低めになる傾向が認められているものであり、/ε/ で著す文献が出てきたのはその反映である。データでどの程度その傾向が見られるかを観察する。

2.8 THOUGHT の母音 /ɔ:/

この母音に関しては、最初に扱った STRUT 同様、表記に揺れはみられない。しかし、この記号を選択した Jones の時代より、この母音は高くなる傾向を続け、近年の記述では CV6 [ɔ] と CV7 [o] の中間であったから、その時点で /ɔ:/ に表記が変更されていても不思議ではなかった。更に、LPD2, EPD16 などの発音解説では、この母音は実際に [o:] にまで高まっていることが示唆されており、ますます /ɔ:/ への変更が要請される状況になっていると考えられる。本発表でも、データによりその傾向を追う。

3 データによる考察

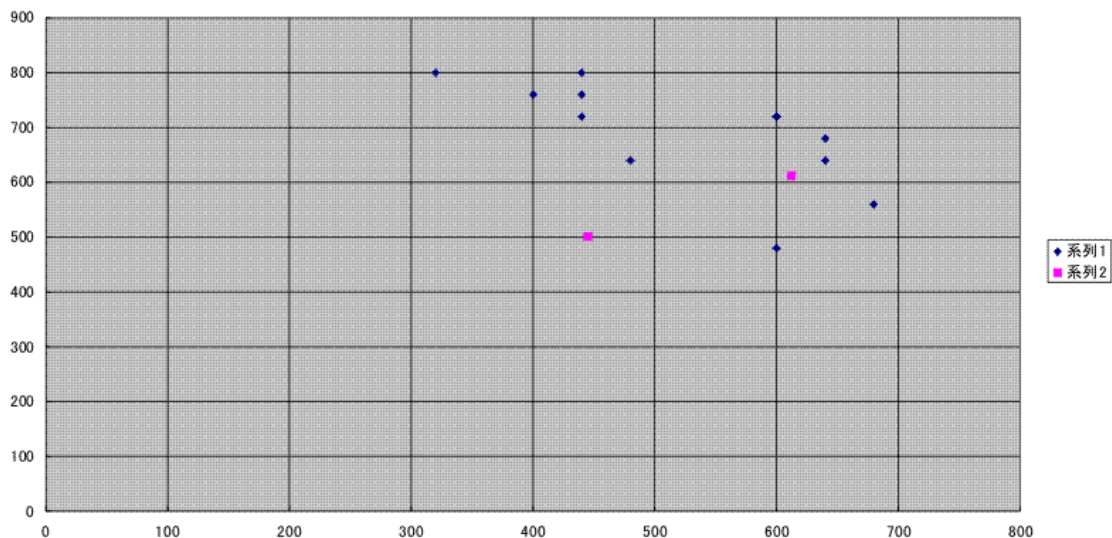
3.0 手法

- 耳による観察に、音声分析ソフトを利用した F1、F2 の観察を加える。
- 使用ソフトは、フォルマントの自動検出機能を持つ Wavesurfer である。
(<http://www.speech.kth.se/wavesurfer/>)
- 基準の母音として IPA の各母音記号の音声を用いる。
(<http://hctv.humnet.ucla.edu/departments/linguistics/VowelsandConsonants/course/chapter1/vowels.html>)
- IPA 音声は男声のため、男声のみで比較する。

3.1 STRUT の母音 /ʌ/

- 観察した単語は **bud** である。ロンドンの音声のみ使用した。
- 多少後ろよりに感じられる発話が1~2つあるが、全体としてはやはり中舌母音であり、/ʌ/ を使い続けるのは不適當である。

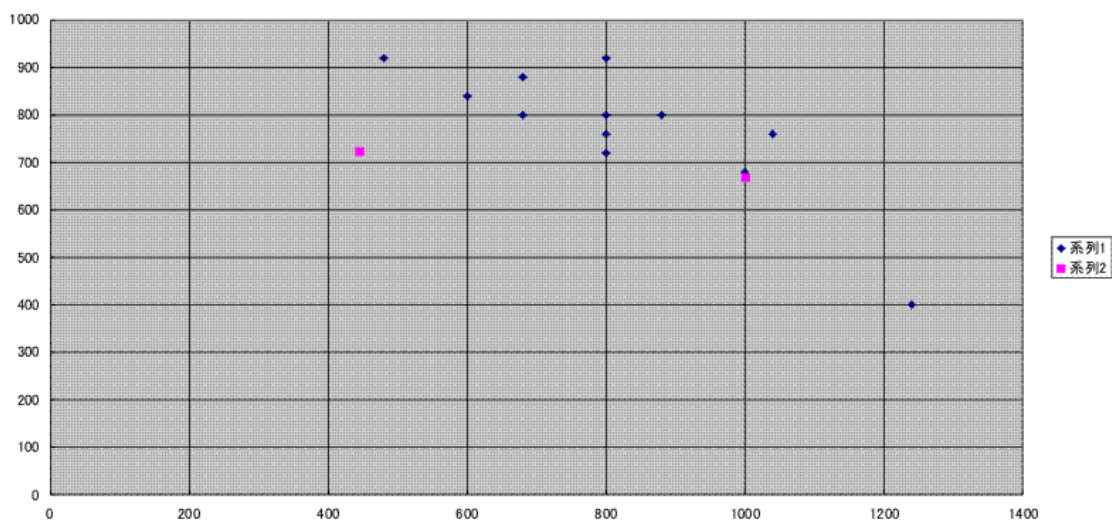
§ 3. 1



3.2 TRAP の母音 /æ~a/

- 観察した単語は **sad** である。ロンドンの音声のみ使用した。
- [æ] と [a] の中間に感じられる発話が大部分である。表記の変更が必要な段階かどうかは、このデータを見る限り、微妙なところである。

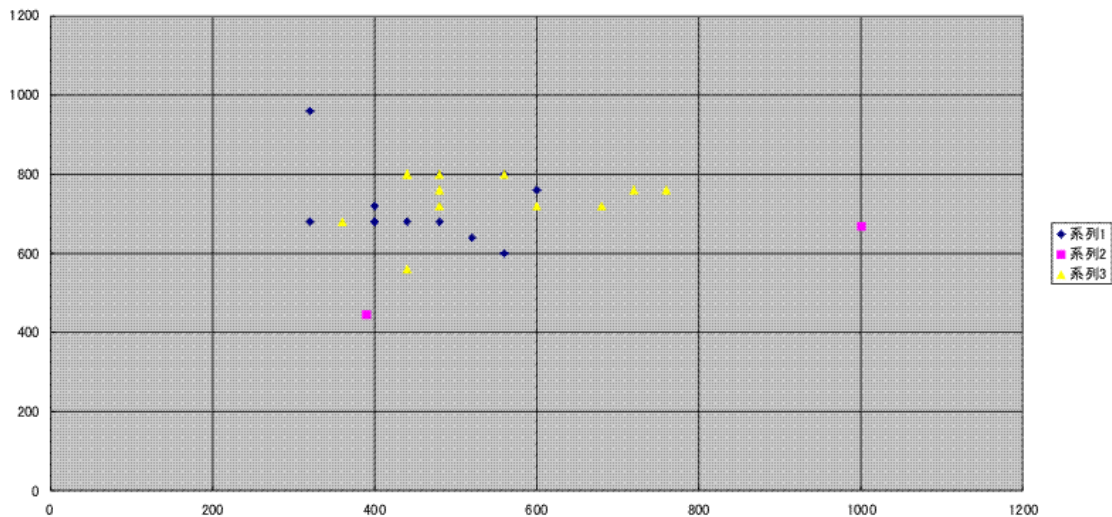
§ 3. 2



3.3 BATH の母音 /ɑ:~æ/

- 観察した単語は **bath** である。ロンドンとバーミンガムの音声を使用した。
- 驚くのは、/æ/ が普通であるはずのバーミンガムでさえ、/ɑ:/ の発話が多いことである。この状態で、“標準的発音”の中に /æ/ を加えるのには無理があるのではないか。

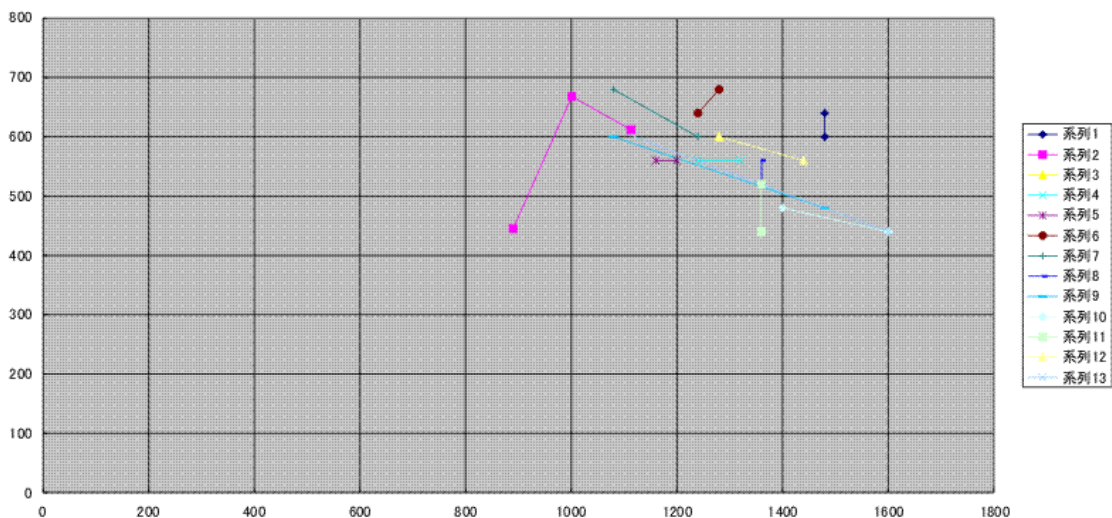
§ 3. 3



3.4 SQUARE の母音 /eə~ε:/

- 観察した単語は **shared** である。ロンドンの音声のみ使用した。
- 2つの発話でわずかに二重母音性が感じられるのを除けば、ほぼ全面的に単母音となっている。/ε:/ への移行が適切であろう。

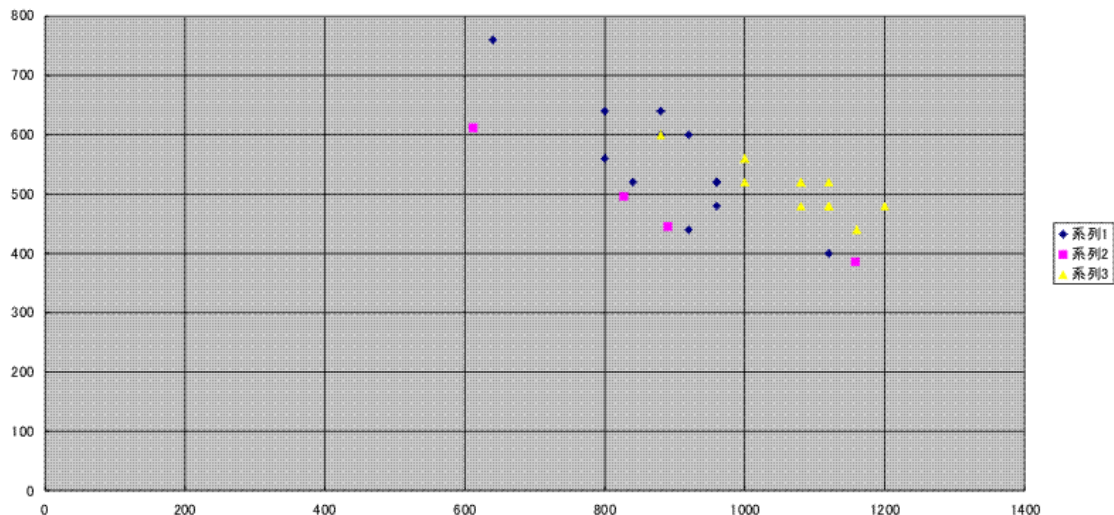
§ 3. 4



3.5 NURSE の母音 /ɜ:~ə:/

- 観察した単語は **curd**、および **method** の第 2 音節である。ロンドンの音声のみを使用した。
- **curd** よりも **method** の第 2 音節の方が僅かに狭く感じられる。この点で、記号の使い分けの仕方としては正しい。

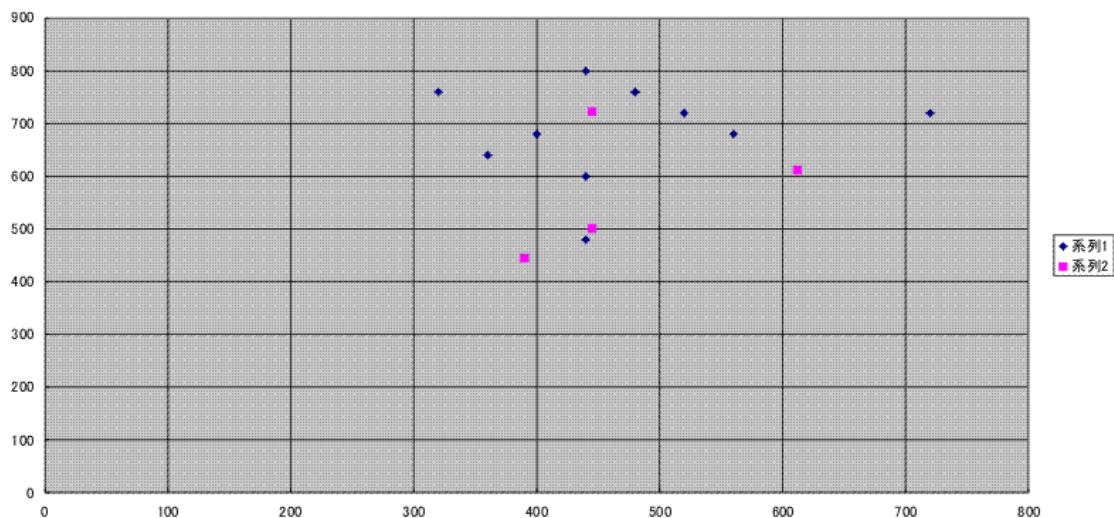
§ 3. 5



3.6 PRICE の母音 /aɪ~ʌɪ/

- 観察した単語は **ride** である。ロンドンの音声のみを使用した。
- 出だしの母音は、[a] よりも後ろ寄りではあるが、/ʌɪ/ で表されるような“狭さ”は感じられない。/aɪ/ のままが適当であると考えられる。

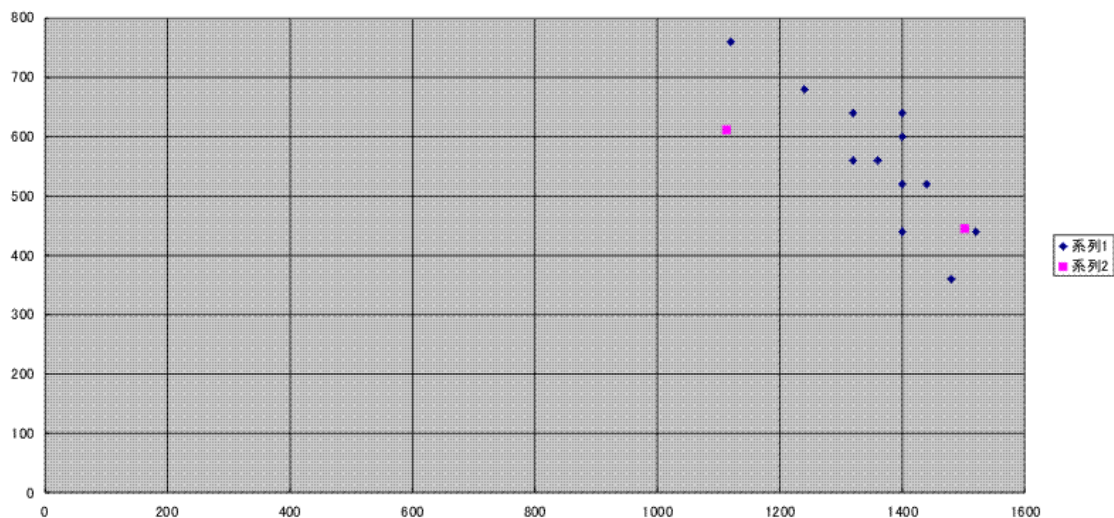
§ 3. 6



3.7 DRESS の母音 /e~ε/

- 観察した単語は **head** である。ロンドンの音声のみ使用した。
- すべて [e] と [ε] の中間であるという印象である。敢えて /ε/ を用いるほどではないと考えられる。

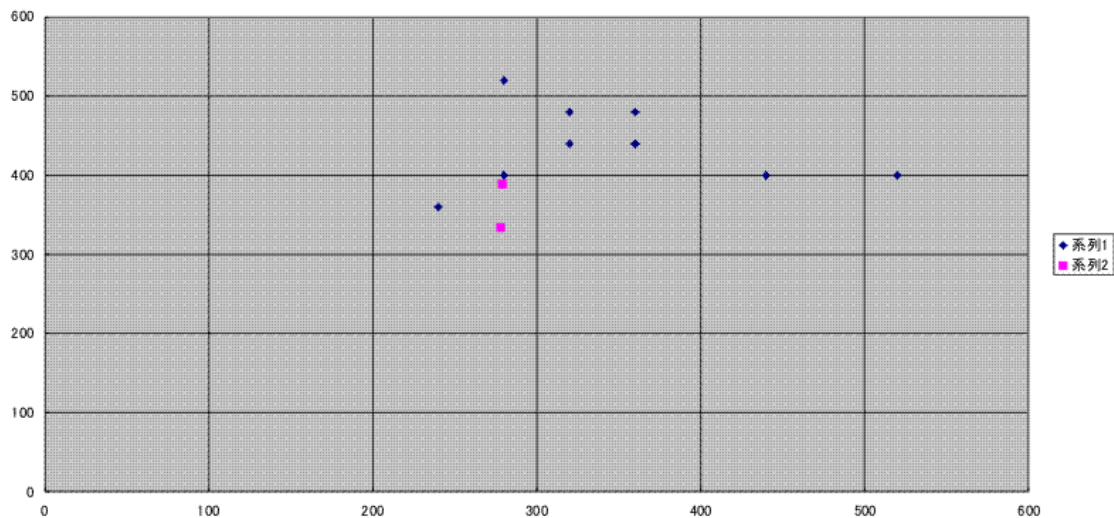
§ 3. 7



3.8 THOUGHT の母音 /ɔ:/

- 観察した単語は **thought** である。ロンドンの音声のみ使用した。
- フォルマントの比較には十分に現れていないが、すべて [o] で表すのが適当な狭さである。/ɔ:/ への変更が望まれる。

§ 3. 8



4 おわりに

あまりに保守的な表記体系に関しては、実際の発音から乖離してしまっただけで評判の悪い英語の「綴り字」と同じ道を発音表記がたどってしまいかねない恐れがあり、一部にはIPAの原則に反するという弊害をも生じている。

英語の標準的イギリス発音は、記号体系の標準化も進んでいることがその特徴であり長所でもあったが、変化が確定的になったのであればできるだけ機動的に表記も変更することが望ましいと考える。

また、今回は標準的なイギリス発音についての検討になったが、同様の問題は標準的なアメリカ発音にも存在すると考えられるため、これもデータがそろい次第検討を加え、アメリカ・イギリス双方にバランスのとれた表記体系の整備をすることを念じたい。

参考文献

International Phonetic Association, The. (1999) *The Handbook of the International Phonetic Association*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jones, Daniel, Peter Roach, James W. Hartman and Jane Setter. (2003) *English Pronouncing Dictionary*. 16th ed. Cambridge: Cambridge University Press. [EPD16]

牧野武彦 (2002) 「イギリス・アイルランド 5 都市の母音」 日本英語学会第 20 回大会ワークショップ「記述的英語音声学に対する日本からの貢献」(2002 年 11 月 16 日、於青山学院大学).

Roach, Peter. (2001) *English Phonetics and Phonology: A Practical Course*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

Upton, Clive, William Kretschmar, Jr. and Ray Konopka. (2001) *The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*. Oxford: Oxford University Press. [ODP]

Wells, J. C. (1982) *Accents of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J. C. (2000) *Longman Pronunciation Dictionary*. New ed. Harlow: Longman. [LPD2]